この心如来となる

三寶寺の参拝口で

今日もまた、三寶寺の本間のガラス戸のなな め前で、杖をついた老婦人がおじぎをされていた。私は参拝者の見送りのため外に出ていた。声をかけさせていただいた。

「ようこそ、どうぞお参り下さい」

と言ってから、アッと思った。

本間に上がるには、道路と敷地までの段差、玉砂利、三段ほどの階段がある。杖をつき、左足を引きずっている人には、とても容易ではないのである。

「奥さまはいらっしゃいますか？　いつも声をかけていただいてます」

私はホッとした。今日が初めてでないことを。そして声をかけていただいていることが本当に嬉しそうな笑顔で答えてくれた。

「倒れてつらかったです。リハビリは痛くてつらかったです。痛くても体を動かして動かして、三寶寺にお参りにきています。本間にあがり、お参りをしたいのですが数センチの段差も足が持ち上がらず、ひっかかります。ですから、段差の手前の道路側から杖を支えにして、お辞儀をさせていただいております。私は母と同じ病気になりました。私が娘の時、母は私に言っていました。あんたは冷たいね。痛い、つらいね……と暗く言っていました。どうすることもできない娘の私は、話しかけるわけでもなく、ただ見守っているだけでした。今私は、母と同じ病気になってしまいました。なってみて母の気持ちがわかりました。リハビリをしている時、それはそれは痛いのです。何回もどうなってもいいとあきらめかけました。その度に周りの人々が、一緒にリハビリをしている人々が声をかけてくれました。母の時代には、寝たきりになってしまいました。リハビリを一緒に、声をかけあって目標をきめて機能回復をするところがなかったのでしょうか。娘の私は何もできなかったのです。わかっていただけるでしょうか？　それでも今、人の冷たさが気になります。私の痛さを誰もわかってくれません。人は冷たいね。生きていくことがつらいと、愚痴を言いたいです、母のように。退院をして、母のように寝たきりになってはいけない、激痛の中でも、一歩でも多く歩み出さなければいけない。母が励ましてくれている。母にがんばりをみせなければならない。母と同じ体験ができているのですから。三寶寺さんの参拝を楽しみにしております。公園の桜も満開となってみえますね。坊守さんが『ようこそ、ようこそ』と言って下さる声は、母なる声ですね。参拝への道で苦がとけます」

救世観音大菩薩
聖徳皇と示現して　多々（父をいう）のごとく　すてずして　阿摩（母をいう）のごとく　そいたまう

皇太子聖徳奉讃　愚禿善信作
岩波文庫親鸞和讃集　名畑應順校注

阿弥陀如来のあらわれは、慈父の如く哀れんで捨ておかず、悲母の如くつき添って護り給う。苦のもとを気づけるようにし、助ける縁によって救う。

合掌

しんらんさまかるた　④

親鸞聖人のご生涯を題材にした「しんらんさまかるた」（すずき出版・工藤市郎絵）をご紹介しながら、聖人のご生涯、御教えにふれていきます。

ろっかくどうに
ひゃくにちの
おまいり

比叡山で修行をしながら、親鸞さまは悩み苦しまれました。「これでいいのだろうか。これで、ほんとうに人間は救われるのだろうか」という尊いお悩みでした。そして、ついに二十九歳のとき、京都の六角堂へ、百日のお参り（参籠）を始められたのです。

きららざかで
おんなの
ひとに

比叡山への帰り道、きらら坂で親鸞さまは美しい女の人に出あわれました。「お山へ私を連れていってください。」当時の叡山は女人禁制です。「動物の雌は山に住めないのですか。」

親鸞さまは、悩んでしまわれました。

ゆめの
おつげに
かんのんさまが

親鸞さまが京都の六角堂に参籠を始められて九十五日目、夜明け近くお堂の中で夢を見られました。聖徳太子が観音さまのお姿になって親鸞さまの枕もとに立たれ、これから歩むべき道を教えられたのです。それから間もなく聖人は法然さまに出あわれました。